

れている。また、それが「キリスト教伝統の意義」を低減し、キリスト教を哲学化し矮小化する「暴力」とも批判される。ただし、ヴァッティモ自身が強調するよう「一つの解釈にすぎない」とすれば、「キリスト教とはいかなる自画像を受け入れるのか」という問題提起と解することができよう。また、キリスト教的諸概念に依拠するその構想には、グローバル化社会における有効性も問われようが、そもそもヴァッティモの宗教理解が普遍化を志向するものではなく自身の「地平」を自覚した倫理的なものであるがゆえ、「意義」を検討することはむしろ他文化圏の側に投げかけられることとなる。ただし、R・ローティーが同様の前提を共有しつつも、地平としての伝統の意義よりも、むしろそれを踏まえた「未来への志向」を語るように、「なぜ伝統か？」の必然性は改めて問われることはなろう。

宗教の現実態と宗教の諸研究——思想研究と実証的研究——

小田 淑子

(一) 問題提起 宗教の現実態という問題意識は、宗教行事に参加しつつ公然と無宗教を自認する現代日本人の宗教状況に由来するが、宗教の現実態はどの宗教にも見られる。宗教の現実態は理念や教義を逸脱しつつしかも一定の規範性をもつ宗教的行為や諸観念であり、日本では主体的信仰とは程遠く、慣習として根強く存続する祭や年中行事である。それは聖典などに基づく宗教思想研究では無視されてきた研究対象である。宗教の現実態は、宗教離れという意味での世俗化が進んだ間にもずっと存在していた。一方では、世俗化論はイスラーム復興の

ように当時は存在しなかった宗教や社会の変化に応じて再考を迫られてきたが、他方では、当時の理論が看過した問題もあり、その一つが宗教の現実態ではないだろうか。

一部は世俗化論の再考と関連しつつ、宗教概念の見直しも盛んに行われている。宗教の現実態を宗教学的に解明することは、宗教概念の見直しを逆方向から行うことを意図している。日本の宗教の現実態には、仏教学、民俗学、宗教社会学でさえ単独では解明しきれない複合的な問題が含まれている。既存の宗教理論の批判から始めず、宗教の現実態という研究対象に従来の諸理論をむしろ積極的に適用し、できるかぎり統合する試みでもある。

(二) 宗教の現実態の諸相 伝統宗教が存続するかぎり、その現実態が存在する。タイやチベットでも仏教と民間信仰などが混在しているが、仏教が日本より明示的に意識されている。その点を考えると、日本では仏教以上に神道という基盤あるいは枠組みが強く、それが宗教儀礼を「慣習」とであると意識し、慣習が一種の規範性を付与してきたように思われる。キリスト教やイスラームの現実態に、教義から逸脱した崇拜や祈願が含まれることもあるとしても、それらも含めてキリスト教やイスラームとして意識される。欧米で世俗化論が盛んになった折、教会礼拝に参加する信徒数の減少がその指標として使われ、宗教の現実態は神意識や罪意識などの「見えない宗教」に求められた。だが、欧米および世界各地のキリスト教社会で、教会の可視的存在と意味は持続している。イスラームでは五行の儀礼は教義との一致が顕著だが、シャリーアとウンマの理念

と現実態のズレが大きい。世俗主義国家トルコも国家から分離独立した「教会制度」を創設することなく、顕著にイスラーム社会であり続けている。なお、以上の宗教の現実態はすべて多数派宗教の現実態を概観したが、少数派宗教は多数派宗教の現実態のなかで、それと妥協しつつ、独自の現実態を保持する。少数派宗教にとって現実態は彼らの帰属意識の表現として、多数派宗教の場合とは異なる重要性をもつ。

(三) 宗教の現実態の理解と宗教学 どの宗教伝統においても、宗教の現実態はその宗教共同体のあり方を基盤に存続し、現実態がその共同体を再生産する手段になっている。物心のつく子供が見慣れる風景、鐘や祈りの音、祭りの楽しさが宗教を宗教として意識することなく宗教に接する場面である。無文字社会では儀礼が重要な宗教教育を担ったが、今日でもその機能を引き継いでいる。宗教の現実態は教義から逸脱するだけではなく、理念や教義への通路となっていることを思想研究も無視すべきでない。神道と仏教という異質な宗教の共存、矛盾を感じずに双方に帰属する宗教意識を支える基盤に日本的宗教の共同体とその現実態があると解釈できる。それは仏教のみの制度化では説明できず、民族宗教としての神道の宗教共同体を積極的に評価する方法を工夫しなければならない。宗教の現実態を解明するには、古典的な宗教理論が使えないのではない。宗教の統合的理解を求める宗教学にとって、宗教の現実態の研究は試行錯誤の機会を与えられられる。

幸福の宗教学

関 一敏

スカブラは役立たずだが仲間を笑わせたり鼓舞したりする筑豊の坑夫の一類型である。仕事には勤勉でないのに、そこだけはえらく勤勉に坑道を上り下りして時間を見てはそれを告げに降りてくるこの人物像は、まるで自らが時を刻む振り子のようなものである(上野英信『地の底の笑い話』)。こうした人物のもつ微妙な魅力と能力は、個人を切りとる生産性の指標からはとらえきれない。最小単位の individual ではなく、あらかじめ社会性を含みこんだ person (人となり) としてあいだの成果をこそ測るべきである。

六年前から福岡市史民俗篇にかかわり、これまで考えてきたことを日常的なマチバのフィールドで実演すべく試みている。配布資料はそのための手控えて、①五感と日常、②マチバの幸福、③友だちと仲間、が主たる課題である(「嗚呼!閑話」『市史研究ふくおか』七号)。今回は②の話をする。

happiness の訳語を幸福にすることに西周と福沢諭吉はある種のためらいを感じていたらしい(山田洸『言葉の思想史』)。幸福を「求めて得られるべき福祉」とあえて形容句つきで定義したうえで「たまさか訪れる僥倖」と区別した。前者がハピネスの条件付き訳語とすると、後者には「しあわせ」「さち」の語感がある。すでに吾々の用法には両者を区別する意識が薄れてしまっているが、元来「仕合わせ」には「よい・悪い」が伴っていた。「仕合わせのよい人、又は家の話を承りたい」という百項目めの問いはその一例である(柳田國男「山村調査」一